

# 新書紹介

## 新市民時代の文化行政

中川幾郎 著  
公人の友社 百八十頁 二千円

旅が好きである。ここ数年の旅のパターンはどうも、「居心地の良い場所」を求めての旅であつたような気がする。そして、それは結果的にはヨーロッパへの旅を重ねることになつている。

ヨーロッパの居心地がよいのはなぜだろう。私見を申せば、「自分の居場所を愛し、その場所から生み出されるものを大切に、誇りに思う人々が生活している」からだと思つている。こういう人たちの生活の積み重ねが地域の文化、時として世界に誇り得る、世界中から人を集めてしまう文化をつくりあげ、とも言われぬ「いい感じ」を醸し出しているように思うのだ。

この夏、九州に出張した。九州に滞在したのは初めてだったが、ヨーロッパと同じ雰囲気を感じて帰つて来た。居心地がよいのである。以来、すっかり九州に取りつかれ、九州に通つて

いる。骨董(こつとう)屋の主人が旅人にまちづくりを語り、みやげにと、さらさらと筆を走らせ、墨絵をくれる。喫茶店のおやじがクラシックコンサートのお企画で走りまわり、道端で「明日が本番だからよー、来てくれよー」と近所の人と立ち話をしている。そういう人たちのいる町に「文化がおう」のである。

さて、ひるがえつてわが横浜である。文化の香りただよ居心地の良さは……。満たされていない部分を旅で充足していることは、前述したとおりである。横浜はイメージ先行都市であり、イメージが悪いより良い方がラッキーというものだが、いかんせん居心地はよろしくない、と思うのだ。このままでよいのだろうか？

区役所から地域文化振興担当

という組織がなくなつたのは、昨年のことである。たまたま、その場に居合わせ、これまでと異なつた枠組みの中で仕事をせざるを得なくなつた時、「なぜ行政が、文化みたいな一部の市民しか必要としないことに取り組むんだね？」という疑問にまともに答えられなかつた苦い経験がある。あの時、この本を読んでいけば、文化行政を誤つてとらえている上司にもっとまっとうに議論できたのになあと悔やまれる。文化行政を進めるにあつたての理論武装や仕事の再構築に向けてのヒントがちりばめられている本が、ここにご紹介する「新市民時代の文化行政」である。

著者は豊中市役所で女性政策、国際交流、文化行政担当を歴任し、現在は広報課長をしている団塊の世代の男性である。「狭義の文化」一筋ではないが、「文化一筋」で歩んで来たとの自負が随所に見え隠れしている。気持ちのこもつた一冊となっている。

はしがきで本書の意図するところを「自治体文化行政の立脚すべき文化観や、そのめざすべき姿について、実務者の立場か

らのべたもの」と述べている。そして警告している。行政の文化を怠つた都市は、社会とのミスマッチに気付かず、ひいては「組織的硬直や衰弱と、時代状況からずればじめる事業の固定化、政策開発の遅れや後退がつぎつぎとやってくる」(うーん、これはわが町のことか…)と。対策型施策から縦割りを排した総合政策行政への転換を図るキーワードが「文化」である、と(そんな認識、誰かもつてるかなー)。

筆者の、よつて立つところは明快なのである。「自治体文化行政の基本理念は、市民の文化的権利の保障とこれにつながる市民自治の活性化にあり(中略)自治体文化行政は新たなシビルミニマムを保障する行政なのである。」そして、市民文化のみずみずしい活性化や都市文化の力強い創造のために、「住民客体主義」から「市民主体主義」へと行政サイドの発想の転換も強く求めているのである、と同時に市民サイドの転換、成長も求められているのだ、と。

システム手帳と同じ大きさで、薄手の本である。表紙も黄色で、この手の本としては、目立つ。

ネオ・シチズンなどという刺激的な言葉も盛り込まれている。一度手にして、キーワード探しをしてみたいかがだろう。

「文化」の概念が広がり、「文化」施策の再構築に役立つと思う。特に「文化なんて好きな人が好きなようにやっているのであるから、行政は手だしする必要なし!」と思つている、五十歳以上の方に読んでいただきたい。(特に誰かを想定している訳ではありません。悪しからず) 企画局調整第三課担当係長 荒木田百合